

山梨県若者海外留学体験人材育成事業(大学生等コース) 留学結果報告書

今回の留学において、私はスロベニアという異国に約10か月間滞在し、多国籍の方々と触れ合うことで多くのことを肌で感じ、吸収できたのではないかと感じている。それらを大きく二つに分けると、一つはスロベニアでの生活を通して学んだことであり、私の人間的な成長につながるものであると考える。そしてもう一つは留学目的であったスロベニアでのワインの醸造や消費文化において学んだことである。それらを通して、今後私がどのように考え、感じ、今後活かしていきたいのか以下に述べようと思う。

スロベニアでの留学生活というのは、私にとって想像以上に大変なものであり、多くの人の手助けがなければ途中でドロップアウトしていたのではないかと感じる。というのも、私は今回山梨大学から交換留学制度を使ってスロベニアのリュブリャナ大学に留学したのだが、所属大学からの留学した前例がなく、かつ私の渡航前のリサーチ不足もあり、文字通り留学当初は右も左も分からなかったためである。だが、その一方であまり日本人が行かないマイナーな国に行くことによって、ネット上では得ることのできなかつた沢山の情報を得ることができたのも事実だ。



図1. 日本語学科の友達とカーニバルへ

私の一番の支えとなってくれたのは、リュブリャナ大学の文学部日本語学科に所属する友達だ。彼らは、日本の歴史、文化に関心を持ち、日本語の勉強に驚くほど熱心だった。彼らはとても親切であり、学校の授業システムやスロベニア語を丁寧教えてくれた。

スロベニア人の母国語はスロベニア語であるが、彼らの多くは英語を流暢に話し、さらにはイタリア語やクロアチア語など、3,4か国語を操る人もおり、言語の習得に長けていると感じる。その理由として、スロベニアは1991年に独立するまでユーゴスラビアの一部であり、長い間他の国の支配下にあったからだといえるだろう。その歴史があったため、スロベニアには言語だけでなく、食文化や街並みにも近隣諸国の影響を感じる部分がある。そして、私が驚いたのは、若者であってもヨーロッパをはじめとする世界的な国際問題や政治に関心があり、それをお酒のある場でも真剣に語り合っていることだった。若者が

山梨県若者海外留学体験人材育成事業(大学生等コース) 留学結果報告書

考え、議論し合わなければ10年先の国も在り方も分からないという危機感を持っている彼らを見て、私もその姿勢を見習わなければならないと強く思った。

またそのような歴史背景からか、彼らは外国人にとっても寛容的で差別的な言葉を滅多に口にしない。多くの人が親日であり、田舎町に行っても私が日本人と分かると「スシ！ノリアキカサイ！」と話しかけてくれる。ちなみにスロベニアではスノースポーツが盛んある。スロベニアは治安も良く、自然の綺麗な先進国であるため、観光面においてもこれから日本の大事なビジネスパートナーになることを期待したい。

私の留学生活を支えてくれたのは友達や先生だけでなく、スロベニアの国全体としてある学生へのサポート制度もあげられる。スロベニアでは、留学生の場合やその他特別な場合を除き、小学校から大学院までの学費は無償であり、留学生も場合によってはスロベニア政府から奨学金を受給することができる。そのうえ大学生であれば、カフェやレストランで食事をする際に割引を利かせることのできるシステムが存在する。



図 2. 割引制度を利用した時のマクドナルドでの食事(サラダ、果物等もセットで約2ユーロ)

具体的には、携帯電話のシムにクーポンを搭載することができ、食事の際には携帯電話を機械にかざすと約300円の割引が利く。月20回まで使うことができ、国内にある約200店舗で利用可能なため、大変便利な制度である。

この他にも、美術館や博物館、図書館でも学生であれば安価で利用することができる。スロベニアのこのような制度は、正に国の未来を担う学生が本分である学業に専念できるようなサポートシステムであり、少子化の進む我が国でも必要になってくるのではないかと感じた。

留学中、このような心強い仲間やシステムがあったにも関わらず、

想像以上にハードであったのは、大学生活を送る難しさがあったのと、寮での共同生活に中々慣れなかったためである。まず、大学では留学生としてワインや食物に関する科学的な授業をとりたいと考えていたが、留学生にとっての時間割は存在しない上、スロベニア語で行われる授業には全くついていけないため、個人授業を行う等の特別措置をとって頂いた。

山梨県若者海外留学体験人材育成事業(大学生等コース) 留学結果報告書

授業システムをきちんと理解していなかった私は非常に戸惑い、各クラスの教授の部屋へと駆け込み相談するしか手段がなかった。結果的に、ワイン分析等の実験の授業や、私が山梨県でのワイン造りをプレゼンテーションするという個人授業等を受けることができた。自ら考え、調べ、行動を起こすという自主性や行動力がいかに大切であるかを学び、それ以後の留學生活ではイタリア人宅にホームステイをして異文化を体感する等、様々なことにチャレンジできたのではないかと思う。

また、留學中は大学近くの寮で、他の国々から留學している学生3人と生活を共にした。チェコやマケドニア、ギリシャ等、留學生の多くは他のヨーロッパ諸国から来ており、会話の流れについていけなかったり、それぞれの英語に独特な訛りがあって聞き取りにくかったり、と自分の英語力や教養の無さに絶望していたこともあった。しかし、恵まれたことに彼らは事あるごとに私をイベントに誘ってくれたり、一緒にごはんを食べようという提案をしてくれたりしたので、

段々と馴染むことができた。勿論世界の共通言語である英語を学ぶことは重要だが、それ以上に誰にでもオープンに、そして私の周りにいたフラットメイトのように互いの文化や習慣を理解しようとする姿勢が大事だと感じた。



図3. 寮でフラットメイトとインターナショナルディナー

次に、ワインに焦点を当てて留學中学んだことを述べたい。といっても、学んだというより感じたという書き方が適切かもしれない。なぜなら、人口の約7割がキリスト教徒であるスロベニア人にとって、ワインはキリストの血であり、日常生活から切っても切り離せないような存在であるからだ。スロベニアはワインの一人当たりの消費量が世界第4位と言われ、四国ほどの大きさしかない国内で約28000軒ものワイナリーが存在する。ワインと共にのんびりとした生活を好む彼らだが、多くの人が高品質なワインと、少し味の劣った安価なワインをそれぞれ分けて楽しんでいるように感じた。スロベニアの醸造用の葡萄畑は、0.5ヘクタールよりも小さいところが多く、その分量よりも質を向上させることに重点を置く生産者が多い。スーパーでも大抵20ユーロから売られており、他国から輸入されたワインよりも値段が高い。だが実際に、スロベニア人の多くはスロベニア産のワインを購入することはなく、近所の方からもら

山梨県若者海外留学体験人材育成事業(大学生等コース) 留学結果報告書

うことがよくあり、私も叔父さんが醸造家であるという友達からペットボトルに詰めたワインを頂いたことがある。このようなことが可能になるのはワイン醸造や売買に関しての厳しい法律がないからだろう。

一方で、スロベニア人はスーパーで外国産の安価なテーブルワインを買い、最初から炭酸やオレンジジュース等で割って飲むことがある。いずれにせよ、スロベニア人はワインを大切に、たとえ口に合わなかったとしても残さずに楽しみながら飲んでいるように感じた。スロベニアで生産したワインのうち、約7割は国内で消費され、残りはほとんどヨーロッパ国内で消費される。文化の違いが大きいといっても、どうして日本よりもずっとワインの消費が多いのかを考えていたある日、首都リュブリャナでこのようなワインフェスティバルが行われているのを目の当たりにした。



図4. リュブリャナでのワインフェスティバル

ワインの生産者とリュブリャナ市の協力のもと行われていたこのイベントは、年に2回ほどあり、毎回多くの来客で賑わっている。約30軒の県内ワイナリーの生産者自らワインを注ぎ、1杯1ユーロから飲むことができる。このイベントの最大の特徴は、リュブリャナ市内で最も人通りの多い目抜き通りで行われることだ。山梨県内でもこのようなワインのイベントは行われているが、こんなに多くの人々が気軽に県産ワインを楽しむことができるイベントはそうないと思う。

日本でもワイン愛好家だけでなく、普段はあまり飲まないという人でも、手軽にワインを楽しむ機会を作ることによって、国内のワイン需要が高まるのではないかと感じた。

山梨県若者海外留学体験人材育成事業(大学生等コース) 留学結果報告書

また、街の観光案内所に行くとき様々なツアーやイベント情報を手にいれることができるのだが、その中でも人気なのが、リュブリャナのワインバーで行われるワインのテイasting会であり、毎日行われていた。これは、スロベニア各地方の6種類のワインを醸造家の英語解説付きで試飲することのできる観光客向けのイベントである。スロベニアの地図を前にしながら、産地におけるぶどう品種の違いや、スロベニアでの生産量が多いオレンジワインとロゼワインの違いを説明して下さったため、初心者でも楽しむことができるイベントだと感じた。



図 5. リュブリャナのワインバーでの試飲会

これらの催しや、ワイナリー訪問を通じて考えたこととして、山梨県産のワインを国内だけでなく、海外の人々に周知してもらう必要があるし、そのためにできる取り組みは多岐に渡っているのではないかということだ。私の友達のほとんどは、日本でワインを生産していることを知らないが、富士山の近くの地域で多く作っているのだよ、と説明すると彼らはそうなのかと関心を抱いてくれた。山梨県産のワインは海外のワインコンクールにおいても賞をとるなど、評価を上げているが、その認知度はまだまだ低い。ワインはその味だけでなく、そこからその生産地域の気候や風土等を感じ取ることで唯一無二の飲み物だ。山梨の素晴らしい景観と共に、繊細なワインが造りだされていることをもっと多くの人に知ってもらいたいと感じる。そのためにはSNSの活用や、海外観光客向けのワイナリーツアーの開催、また上述したようなワインの試飲会も有効な手段だと考える。個人レベルにおいても、より英語のスキルをアップさせ山梨県産のワインをより海外に、そして国内の人にも知ってもらえるよう努力したいと思う。

これらの催しや、ワイナリー訪問を通じて考えたこととして、山梨県産のワインを国内だけでなく、海外の人々に周知してもらう必要があるし、そのためにできる取り組みは多岐に渡っているのではないかということだ。私の友達のほとんどは、日本でワインを生産していることを知らないが、富士山の近くの地域で多く作っているのだよ、と説明すると彼らはそうなのかと関心を抱いてくれた。山梨県産のワインは海外のワインコンクールにおいても賞をとるなど、評価を上げているが、その認知度はまだまだ低い。ワインはその味だけでなく、そこからその生産地域の気候や風土等を感じ取ることで唯一無二の飲み物だ。山梨の素晴らしい景観と共に、繊細なワインが造りだされていることをもっと多くの人に知ってもらいたいと感じる。そのためにはSNSの活用や、海外観光客向けのワイナリーツアーの開催、また上述したようなワインの試飲会も有効な手段だと考える。個人レベルにおいても、より英語のスキルをアップさせ山梨県産のワインをより海外に、そして国内の人にも知ってもらえるよう努力したいと思う。

この10か月間のスロベニア留学を通して、スロベニアという国を知りその国で周囲の力を借りながら試行錯誤を繰り返し多くの壁を乗り越えることができたのは、私の人生にとって大きな財産だと思う。奨学金という大きな支えを頂き、このような貴重な経験ができたことに感謝しながら、今後もスロベニアと山梨のワインの魅力を発信できるよう取り組んでいきたいと思う。